当院での大腿骨近位部骨折における骨粗鬆症薬治療の実態

見 明 豪* 野 口 康 男* 佛 坂 俊 輔* 前 隆 男*
佐々木 宏 介* 竹 内 直 英* 松 下 昌 史* 口 石 倫 太 朗*

Osteoporosis Treatment of Hip Fracture Patients by Antiosteoporotic Drugs

Go Miake*, Yasuo Noguchi*, Shunsuke Hotokezaka*,
Takao Mae*, Kosuke Sasaki*, Naohide Takeuchi*,
Akinobu Matsushita*, and Rintaro Kuchiishi*

【背景】骨粗鬆症患者の転倒骨折が増加している。その中で、骨粗鬆症に伴う骨折（脆弱性骨折）はそれ自体で骨粗鬆症の薬物治療適応とされる。脆弱性骨折の代表である大腿骨近位部骨折患者について、骨粗鬆症の薬物治療の現状を調査した。【対象と方法】2007年4月から2011年7月まで当院にて大腿骨近位部骨折に対し、入院加療を行った560例について受傷前後での骨粗鬆症治療薬内服率を調べた。【結果】560例中、骨粗鬆症治療薬内服率は80例（14.3%）であり、反対側の近位部骨折既往の有無別では既往有り18/70例（25.7%）、既往無し62/490例（12.7%）であった。また、受傷後に転院先より退院時情報の報告のあった158例中33例（20.9%）で骨粗鬆症治療薬が処方されていた。【結論】大腿骨近位部骨折における骨粗鬆症薬治療率はかなり低く、急性期病院からの骨粗鬆症対策の取り組みが重要である。

The number of fractures of osteoporosis patients is increasing. Fractures caused by osteoporosis require drug therapy. We conducted an investigation on how to treat osteoporosis in proximal femoral hip fracture patients. We examined the percentage of pre- and post-injury osteoporotic treatments for 560 proximal femoral hip fracture patients treated in our hospital from April 2007 till July 2011. The percentage of pre-injury osteoporosis drug treatment was 14.3% (80/560); specifically, 18 patients out of 70 (25.7%) had a history of proximal hip fracture, on the other side, and 62 patients out of 490 (12.7%) did not. Thirty-three patients out of 158 (20.9%) had a history of taking osteoporosis drugs after they left our hospital. Present treatments using antiosteoporotic drugs for proximal hip fracture are insufficient for preventing additional fractures.

Key words: osteoporosis (骨粗鬆症), hip fracture (大腿骨近位部骨折), antiosteoporotic drug (骨粗鬆症治療薬)

はじめに

大腿骨近位部骨折は年間約15万例にものぼり、整形外科医にとって日常よく経験する疾患であり、近年の高齢化社会に伴い年々増加傾向にある。そのような中、基礎疾患として骨粗鬆症がある場合が多く、骨粗鬆症に伴う骨折（脆弱性骨折）はそれだけで骨粗鬆症の薬物治療の対象とされる。脆弱性骨折の代表である大腿骨近位部骨折発症後に骨折リスクが高まること

が知られているが、骨折した症例に対して骨粗鬆症薬物治療が十分になされていないのが現状である。今回、当院で大腿骨近位部骨折と診断した症例に対して受傷前後での骨粗鬆症薬の内服率を調査した。

対 象 と 方 法

対象は2007年4月1日から2011年7月30日まで当院にて入院加療を行った大腿骨近位部骨折560例で、その内訳は頸部骨折289例、転子部骨折260例、

* 地方独立行政法人佐賀県立病院好生館整形外科 Department of Orthopaedic Surgery, Saga Prefectural Hospital Koseikan, Saga, Japan

転子下骨折 11 例であった。また、治療方法は骨接合 390 例、人工骨頭 154 例、手術なし（保存）16 例であった。それらの症例において、受傷前の骨粗鬆症治療薬内服率、反対側の近位部骨折の既往の有無を診療録等で調査し、地域連携クリニカルパス（以下、連携パス）を用いて転院した連携医療機関における骨粗鬆症の評価と治療の状況を、連携パスフィードバックデータを用いて解析した。

結 果

全症例中、骨粗鬆症治療薬内服率は 80 例/560 例（14.3%）であった。また、反対側の骨折の既往別では、既往有りが 18 例/70 例（25.7%）、既往無しが 62 例/490 例（12.7%）であった。骨粗鬆症の内訳ではビタミン D 製剤が 80 例中 45 例と最も多く、次いでビスフォスフォネート製剤（以下、BP 製剤）（24 例）、SERM（9 例）、カリウム製剤（6 例）、カルシウム製剤（2 例）の順番であった。また、転院先医療機関における骨粗鬆症の評価と治療では、連携パスにてフィードバックのあった 158 例中、「評価し治療開始」が 32 例、「治療のみ実施」が 1 例、「評価のみ」が 22 例、「なし」が 25 例、「不明」が 78 例であり、全体でみると骨折後の骨粗鬆症治療薬内服が確認された患者の割合は 20.9% であった。

考 察

萩野ら²³⁾は、2663 例の大腿骨近位部骨折（POSHIP study 終了時 2324 例、転子部 1300 例、頸部 1000 例）のうち、12% が骨粗鬆症の診断を受けているが、薬剤投与は 3 分の 2 に過ぎないと報告している。また骨折後の再骨折は、痩せ型、合併症を有する症例で再骨折が多く、年齢とは相関が無くいずれの年齢でも骨折しやすい。その中でも最も多かったのは 65～74 歳で、他の年齢層と比較して 18.6 倍のリスクであった。一度骨折を起こすと、その後 10 年ほどは高リスクの状態が続くが、骨折が最も多いのは退院直後など、ごく早期であった。その中で、大腿骨近位部骨折の骨粗鬆症治療薬内服率は受傷前は 8.4%、入院中が 26.2%、1 年後が 13.4% であったと報告している。また、その他の国内での研究では⁹⁾、骨粗鬆症関連骨折（股関節、橈骨遠位端、上腕骨近位を含む）422 例のうち、術後に骨粗鬆症治療薬が処方されたのは 55 例（13%）の

みであったという報告もある。

海外では、Collinge ら¹⁾は、238 人の外傷患者を group 別にわけ、その中の 73 人（30%）の high risk osteoporosis group と 51 人（21%）の moderate risk osteoporosis group に対して、患者教育、カルシウム製剤、ビタミン製剤による薬物治療を施すと、high risk group の follow up では 12 ヶ月後も 47% で薬物治療を継続していたと報告している。

そのようなデータを踏まえ、当院では、薬物治療および継続率向上にむけて、脆弱性骨折患者およびその家族を対象として、再骨折予防教室を開き、医師、管理栄養士、理学療法士、作業療法士など多職種による患者家族教育を行っている。骨粗鬆症治療薬として、大腿骨頸部/転子部骨折 診療ガイドラインによれば、アレンドロネート・リセドロネートを推奨しているが、BP 製剤は内服後に 30～60 分程度の座位を強いられ、高齢者の多い大腿骨近位部骨折直後では認知症を伴っていることもあり、また、術直後からの長時間の座位保持は困難であり、急性期からの内服、処方ほとんどされていないのが現状である。そのため、当院では術直後からの内服が比較的容易な活性化ビタミン D3 製剤を中心とした早期からの処方を行い、転院先での骨粗鬆症薬内服の継続率を高めようと動き出したところである。

結 論

大腿骨近位部骨折患者の骨粗鬆症治療薬内服率は非常に低く、再骨折を予防するためには急性期病院からの骨粗鬆症対策の取り組みが重要である。

参 考 文 献

- 1) Collinge, C., et al.: Osteoporosis in orthopaedic trauma patients: a diagnosis and treatment protocol. J. Orthop. Trauma, 22(8) : 541-547, 2008.
- 2) 萩野 浩ら：大腿骨近位部骨折後に発生した新たな骨折例の検討－POSHIP study－. Osteoporosis Japan, 17 (特殊号・増刊) : 198, 2009.
- 3) Hagino, H., et al.: Recent trends in the incidence and lifetime risk of hip fracture in Tottori, Japan. Osteoporosis Int., 20 : 542-548, 2009.
- 4) Iba, K., et al.: Underutilization of antiosteoporotic drugs by orthopedic surgeons for prevention of a secondary osteoporotic fracture. J. Orthop. Sci., 11 (5) : 446-449, 2006.